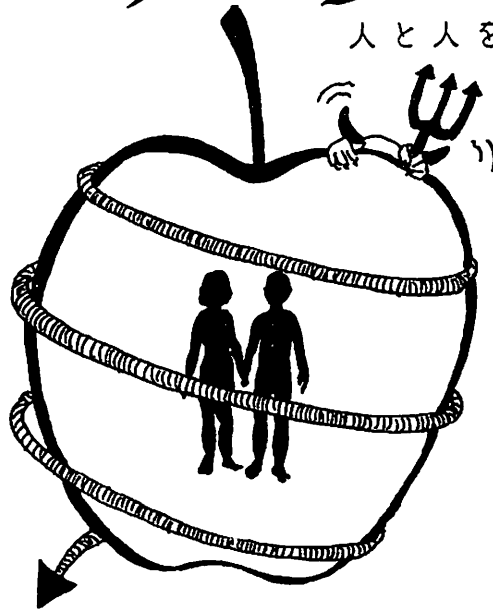


やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌

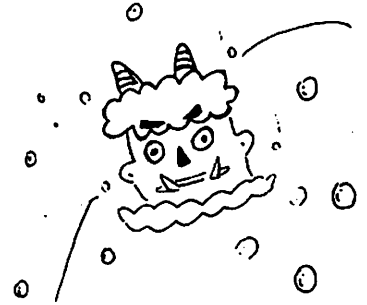


2005年 2月号 / 250円

編集部より	2
若者	3
ハルワとウズラ (独居と隠遁)	4
読め!	6
三つの喪失 (先月からのつづき)	10
祈りのある毎日へ	11
御自分の時代についての言及	12
科学: 「自然災害」	13
サラダクレープ	14
シャイターン (悪魔)	15
「畏れ (タクワー)」	17
シャイターン (悪魔) の囁き	22
カレッジの小石うちいさなわたしの、オクスフォード旅行記 6	23
『アイス・エイジ』 Ice Age	25
ねずみとライオン	27
オマルがアブ・バクルに張り合いを試む	28



毎年節分が近付くと、スーパーなどの店頭には何種類もの豆が並べられます。中には鬼の面がついた豆撒きセットもあり、家庭などでこの年中行事を盛り上げるのに一役買っているのでしょう。楽しい雰囲気の中に込められた無病息災を願う気持ちは今も昔も変わらないのだと思います。



イスラームのマッカ巡礼でも、悪魔を象徴する石柱に向かって石投げを行う儀式があります。預言者イブラーヒームがアッラーの命令に従い息子を犠牲に捧げようとした時に悪魔が邪魔に入ったため、石を投げて追い払ったという故事に倣っているのです。人間に災いをもたらす存在にものを投げ付け撃退するという行為にどこか相通ずるものが感じられるのではないのでしょうか。

人間は善悪両面を備えています。そして何ごとも心の動きに体が従っています。ゆえに善行も悪行も心緒次第となりますが、それらはどのように起こるのでしょうか。人間自身の内側から発生するのか、どこからかやってくるものなのか……。悪の場合、「魔が差す」や「悪魔の囁き」との言葉があるように、人間を誘惑し負の方向へと進ませるなんらかの力の働きかけがあるのは確かなようです。

どんなに自己を強固に保った人でも隙が皆無ではありえません。本人も気付かないうちにそこに巧妙に付け入り、災いを引き起こし、場合によっては身の破滅に追い込むのですから、私たちはその存在を見極めること、そしてよほどの用心が必要なのではないのでしょうか。今月のテーマは「悪魔（シャイターン）」を取り上げてみました。





ある国の将来を占うには、その国の若者に施されている教育や礼儀作法を分析することによって的確に予測できます。

欲求は例えるなら甘いお菓子のようなものです。一方で美德はといえば、塩気や酸味のある食事といえましょう。もし選択が若者の自由に委ねられていたら、彼らは何を好んで選ぶでしょうか。私たちはそれには関わりなく、若者たちが美德の仲間となるように、そして無作法や不道徳の敵となるように育て上げなければなりません。

私たちが教育を通じて手を差し伸べなければ、若者は生まれ育つ環境の奴隷となってしまいます。激しい感情の起伏に突き動かされたり、知識や理性とはかけ離れた状態で当てもなくさ迷い歩くしかないのです。若者たちは教育を通じて、過去の歴史と一体化し未来に向けた知的準備がなされることによりのみ、国の理念や意見を代表できる真に優れた価値ある若者となるのです。

社会をガラスの容器であると考えてみてください。そして社会に所属する若者はその容器に注がれる液体と考えてみてください。液体は容器の形や色を呈することが分かるでしょう。悪質な政治家は、私たちについて来てください、統治の枠組みに従ってください、と若者に呼びかけていますが、一体、己自身の姿を鏡に映して見ているのでしょうか。

一国が発展するか衰退するかは若者たちに授けられた精神や意識、礼儀作法や教育にかかっています。若者をきちんと育て上げた社会は常に発展への道が開けています。一方でそれを怠った社会は一步前進することさえ不可能です。

若者は、能力や強さ、知性を秘めた苗木です。適切な訓練と教育を受けさえすれば、将来は‘英雄’となって、どんな障害も克服し人々の心を啓発して世界に秩序をもたらしてくれるでしょう。





独居と隠遁(ハルワ [Halvet])と(ウズラ [Uzlet])

ハルワとウズラは異音同義の別々の言葉ですが、語源的には両語も「独りになること・独居」と「独りで生活すること・隠遁」を意味します。スーフイズムの文脈においてはどちらも修行者がアッラーへの崇拝にすべての時間を捧げるために精神的指導者の指導と監視の下で隠遁することを意味します。スーフイーたちは、自分の心の扉のうちアッラー以外のものにつながる扉をすべて閉ざし、内なる舌(心の言葉)を通してアッラーと会話することによって、自分自身を真実から隔ててしまうすべての誤った信仰や邪悪な思考や感情、想像や空想から放たれることを求めるのです。

ウズラには2つの側面があり、第一はハルワであって、第二は禁欲はです。ハルワには様々な過程があり、最初のステップは四十日で完遂され、そのためこの修行は「禁欲の四十日の体験」とも呼ばれています。精神的指導者が修行者をハルワへと導く時、彼らは隠居する部屋へと連れて行かれ、指導者が修行者の成功を祈った後そこに独り残されます。修行者はその部屋で完全に一人で過ごし禁欲的な生活を送ります。彼らは、この部屋でほとんど飲食することもなく過ごし、それがアッラーへと近づくことにつながる扉だと考えられています。身体的に必要とされるものは減り、鍛錬され、世俗的欲求は忘れ去られ、すべての時間がアッラーへの崇拝、瞑想、内省、礼拝、祈願に捧げられるようになります。

他人を避け禁欲的であるという側面において、ハルワは時代をスーフイズムの初期どころか預言者たちの時代にまでさかのぼります。人類への恵みである預言者ムハンマド(彼の上に平安と祝福あれ)をはじめとして多くの預言者やワーリー(アッラーに近い人)たちが、人生の一部をウズラの状態で過ごしています。しかしながら、時間を経て彼らの本来のハルワとウズラのシステムは望ましくない変化を受けてしまいました。預言者イブラヒームのウズラや預言者ムーサーの四十日、預言者イーサーの禁欲、そして預言者ムハンマド

(彼の上に平安と祝福あれ)のハルワは、たくさんの人々に異なる方法で実践されてきたため、変化変質を経ってしまったのです。

これはある程度は仕方のないことだとも考えられます。ウズラは個人の心的状態、気性、精神的能力に関係することで、完璧な精神的指導者だけがその修行者がどれだけの期間どのような状況においてウズラの状態にいるべきかを知り決定することができるからです。ルーミーは修行の初期において四十日の禁欲のウズラを何度も経験しましたが、本当の、完璧な指導者に会った時に、ウズラの状態から抜け出し、人々の中に入りました(ジャルワ)。彼の後にも先にも、たくさんの人が他の人々を避けるのではなく人々と交わることを選んできました。

ハルワの2つの側面のうちのもう1つの禁欲は、世俗的な喜びに付けられた手綱を引き締めておき、精神を人間にとって完璧とされるところまで上昇させることを意味します。禁欲を通すことでのみ、世俗的欲求は抑えられ、邪悪な衝動や情熱は放棄され、アッラーの戒律に服従するようになり、そして謙虚な態度を身に付け花壇の土のようになることができます。

土のようにありなさい。そうすればあなたの中でバラが咲くでしょう。

土以外の何もかもバラを育てる培地とはなりません。

禁欲を通じて人は一定のアッラーの恩恵を受けることができます。知識を良いモラルで飾ることができましょう。またそれによってアッラーとの関係と人々との関係どちらにおいても礼儀正しさを得ることもできましょう。このような自分の状態に気付いて、絶え間なくアッラーにより近づくための道を探し求める人たちもいます。ほかにも羽化したばかりのトンボのように、辿り着いたばかりの空という世界で蝶のような精神的な存在

に囲まれて生涯を送る人々もいます。

ハルワにおいてきわめて重要なことは、修行者がアッラーのお喜び以外のものを求めることなく、絶えずアッラーの恩恵を期待して待っていないかならなければならないということです。修行者はアッラーの恩恵を待つ間怠惰であってはならず、むしろ心に流れ込んでくるいかなるアッラーからのインスピレーションや贈り物も見逃すことがないように、そしてアッラーの御前にいるために適切な礼儀正しさや行動をもって、細心の注意を払い同時に期待した状態で心の目を開いて待っていないかならなりません。ラ・マカニ・フサイン・エフフェンディの次の言葉はこの意味を適切に表しています。

魂の泉をきれいにしなさい。それが完全に澄むまで。

瞳を心に定めなさい。心が一つの瞳となるまで。疑念を捨て、心の水差しをその泉に差し出しなさい。

その水差しが喜びをもたらす水でいっぱいになったとき、

自分の身を引き、アッラーの家をその持ち主に差し出しなさい。

あなたがそこを去るとき、間違いなくそこにはアッラーが来られるでしょう。

邪悪な盗賊を決してあなたの心の家に入れさせてはなりません。

一度入ってしまったら、追い出すのはとても困難です。

アッラーはすべての時間や空間といったものに全く拘束されません。アッラーと信じる者との関係は信じる者の心の「斜面」の上で起こります。そのため、心の「エメラルドの丘」や「斜面」は常にアッラーの現れという波を受け取る準備ができていないといけません。そうしたら、エルズルムのイブラヒーム・ハッキの言葉を借りれば、王が夜宮殿に下りられるかもしれないのです。

アッラーは預言者ダーウッドに命じられました。『私のためにその家を空にしなさい。そうすれば私がその中にいるであろう。』『心を空にする』とはアッラー以外のものを心からなくし、最初にアッラーのお喜びを考えることなく他のものに関

係をもたないということであるという解釈がされています。ルーミーの次の言葉がこれを適切に表現しています。

賢明で分別のある人は井戸の底を好む。

魂が（アッラーと）二人きりになれる喜びを見つけるからだ。

井戸の暗闇は人々が引き起こす暗闇よりも好ましい。

人々の脚にしがみつくと人は決して頭に辿り着くことはなかった。

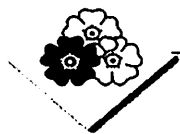
自分自身を遠ざけるべきなのは人々からであってアッラーからではない。

毛皮を着るのは冬にであって春にはない。

ウズラの目的はアッラー以外のものに対する愛の心を浄化することと常にアッラーと共にいることであるので、人々の中で生活しながら常にアッラーの存在を感じ、多様性の中にアッラーの単一性を絶え間なくはっきりと見ることができるとみなされます。しかしながら反対に、独りきりで生活していても心がアッラー以外の何ものかへの執着から解放されることがなければ、その人たちのウズラはごまかしにしか過ぎないのです。

常にアッラーの存在の中に自分自身を感じることができる人たちは人々から遠ざかる必要はありません。このような人々は、ルーミーの言葉を借りれば、片方の足をアッラーの命令という領域に置いたまま、コンパスの針のようにもう片足をまわして世界中を渡るようなものなのです。彼らはすべての瞬間の上昇と下降を体験します。これが預言者やワリーたちが認められ好まれたウズラなのです。

アッラーはかつて預言者ダーウッドに言われました。『ダーウッドよ、なぜお前は人々から遠ざかり独りでいることを選んでいるのか？』ダーウッド（彼の上に平安あれ）は答えられました。『主よ、私はあなたのために人々と一緒にいることを断念しました。』アッラーは彼に警告されました。『常に徹夜で祈り、仲間から離れてはいけない。しかし一緒にいることがお前のたすけとならない者たちからは遠ざかりなさい。』



この冬休み、実家に帰った折に、30年近く物置に保管していたダンボール箱を持ち帰った。中には私が子供の頃読んでいた本がぎっしり詰まっている。娘達が小学生になり、字が読めるようになったので、子供たちに読書を勧めようと思う。

私は小学生の頃、本を読むのが大好きだった。毎月1冊親に本を買ってもらっていたが、その日が待ち遠しくて、デパートの書籍売り場でウキウキしながら本を選んでいたことが思い出される。今でも子供の頃に読んだ本の記憶がはっきりある。本を通していろいろなことに興味を持ちたくさんの大切なことも知った。想像力をふくらませ、ドキドキワクワクしながら読んだ日のことを思い出す。

持ち帰ったダンボールを開けて、なつかしい本と再会した。真っ先に出てきたのは私の最も好きだった童話の「小さなスプーンおばさん」だ。当時、この本を読んで、「著者のアルフ・プリオイセンってどんな人かな？彼に会ってみたい」と思い、好奇心旺盛な私は彼の住んでいるノルウェーという国に興味を持って調べた、一冊の本をきっかけに世界の地理にも興味を持つようになった。

その他にも伝記、神話、昔話、童話、科学に関する本が次々に出てきた。伝記や神話を通して子供ながらに生き方や教訓を学び、昔話を通して地理や歴史に興味を持つきっかけになった。童話はイメージーション(想像力)を豊かにしてくれた。「からだの秘密」や「植物の秘密」、「宇宙の秘密」などの科学の本を通して、私たちの身近には不思議なものが満ちていると感じたし、そういった類の秘密シリーズは未知の世界を知る喜びもあり、とても興味深かった。

本はいろいろなことを教えてくれる。“書かれたもの”を“読む”ということを通して私たちは様々な知識を得ることができる。

今、私たちが本を読むことができ、それを通していろいろなことを知ることができるのも、「書く」「読む」能力がアッラーから与えられているからである。ありがたいことである。アルハムドリッラー。

「読め!」。預言者ムハンマド(S)に最初に下された啓示はこの言葉からだった。そのときのことについてハディースではありありと書かれている。

預言者 40歳の頃、メッカ郊外のヌール山頂のヒラーの洞窟で瞑想していると、何者か(実は天使ジブリール〔ガブリエル〕)が現われて彼を押さえつけ、「読め!」と命じた。預言者は文盲で字を読めなかったので「私は読めません」と言った。すると何者かはまた彼を押さえつけ、再び「読め!」と命じた。預言者は「私は読めません」と繰り返した。何者かは更に彼を押さえつけ、「読め!」と三度繰り返した後、次の啓示を示し、

預言者は復唱した。それが、クルアーンの凝血章(96章)の1～5節である。「イクラ ビスミ ラッビカ ラズィー ハラク (読め！創造なされる御方、あなたの主の御名において)・・・」このようにして最初の啓示が下った。

そもそも「クルアーン」とはアラビア語で「読まれるもの」という意味がある。「クルアーンは手に触れるのも恐れ多いので棚の一番高い所にしまってあってめったに読まない」というムスリムがいたが、まさにクルアーンは“読むもの”なのだ。クルアーンに敬意を払い、一番高い所におくという精神はよいが、クルアーンを大事にするというのは飾り物のようにしておくことではなく、毎日毎日手にとって読むことなのだ。

凝血章 4-5 節に「筆によって(書くことを)教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である」とあるように、アッラーは私たちに書くことを教えられた。つまりその能力が与えられた。そしてまた、私たちはアッラーから知識を与えられた。

私たちは書物を通して様々な知識を得ることができる。口伝では伝言ゲームのように時が経つにつれてももとの言葉が失われたり変化したりするが、書き残すことによって原文を正しく伝え知ることができる。

ハディースには「誰々の伝承による」と冒頭にかかれており、初めて読んだときはうろさく感じ、しつこいまでに繰り返して出てくる伝承経路にいったい何の意味があるのだろうか？と疑問に感じていたが、それも重要な意味があるのだ。伝承経路の鎖(サナド)を大切に記すのもこのハディースが後世の人によって都合のよいように書き換えられたりすることのないよう、またもとの言葉のままに伝えていることの証にもなる。

ありがたいことにクルアーンは何世紀たっても啓示されたときのまま読むことができるのだ。

イスラームでは「知識」を求めることをとても大切にしている。「書く」「読む」というアッラーから私たち人間に与えられた能力であり特権を大いに活かし、知識を深めていこう。

子供たちにも読み書きの大切さを伝え、“読む”ことを大事にしてもらいたい、

・読め、「創造なされる御方、あなたの主の御名において。一凝血から、人間を創られた。」読め、「あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって(書くことを)教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である。」(凝血章 96/1-5)

・またあなたの主が(先に)天使たちに向かって、「本当にわれは、地上に代理者を置くであろう。」と仰せられた時を思い起せ。かれらは申し上げた。「あなたは地上で悪を行い、血を流す者を置かれるのです

か。わたしたちは、あなたを讃えて唱念し、またあなたの神聖を讃美していますのに。」かれは仰せられた。「本当にわれはあなたがたが知らないことを知っている。」かれはアダムに凡てのものの名を教え、次にそれらを天使たちに示され、「もし、あなたがた(の言葉)が真実なら、これらのものの名をわれに言ってみなさい。」と仰せられた。かれらは(答えて)申し上げた。「あなたの栄光を讃えます。あなたが、わたしたちに教えられたものの外には、何も知らないのです。本当にあなたは、全知にして英明であられます。」かれは仰せられた。「アダムよ、それらの名をかれら(天使)に告げよ。」そこでアダムがそれらの名をかれらに告げると、かれは、「われは天と地の奥義を知っているとあなたがたに告げたではないか。あなたがたが現わすことも、隠すことも知っている。」と仰せられた。またわれが天使たちに、「あなたがた、アダムにサジダしなさい。」と言った時を思い起せ。その時、皆サジダしたが、悪魔〔イブリース〕だけは承知せず、これを拒否したので、高慢で不信の徒となった。(雌牛章 2/30-34)

・ 預言者の妻の一人アーイシャはこう伝えている。

「アッラーのみ使いに下された最初の啓示は、睡眠中に正しく現われたものであった。彼はその時、夜明けの薄光のように現われたその啓示を見たのです。その時以来、彼は独居を好まれ、ヒラーの洞窟にこもってタハンヌス(一神教信心)の行に没頭されました。この行は何日も続くため、家族の下に戻るまでの必要な食糧を準備せねばなりません。それが尽きると妻ハディージャの処に帰り、同じように、また数日分の食糧を準備なさったのでした。こうした状況で彼がヒラーの洞窟にこもっていた或る日、彼に啓示が下されたのです。その時、彼の処に天使が現われ、こう命じたのです。「読みなさい!」これに対し彼は「私は文字が読めません」と答えたのです。

(み使いはこれに続けて以下のようにお話しになった)「すると天使は私をとらえ、やっと耐え得るほどきつく押えつけてこういわれた。『読みなさい!』『私は文字が読めません』と答えると天使は、また再び私をとらえ、更に耐え難いほどきつく私を押えつけになり、そうして後『読みなさい!』と繰り返しいわれたのです。これに対し、私は『文字が読めません』と同じ答えを述べたのです。すると天使は私をつかみ、三度もきつく押えつけになった後、私を放し次の聖句をお唱えになったのです。

「読め。創造なされる御方、あなたの主の御名において、一凝血から、人間を創られた。読め。あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって書くことを教えられた御方、人間に未知なることを教えられた御方である」(クルアーン第 96 章 1-5 節)

アッラーのみ使いは、そのままお帰りになったが、心臓は恐怖のあまり震えつづけた。ともあれ、彼はハディージャの処に戻りこういった。「私をなにかで覆い隠しておくれ!」「包み隠しておくれ!」それで人々は彼をその恐怖が去り気が静まるまで布で包み隠したのでした。その後彼はハディージャにこういった。「ハディージャよ。一体何が私に起ったのだろうか?」そういつて、彼は経験したことを彼女に語り「私は

自分が怖くなった」と話した。

これに対し彼女はいった、「恐れる必要はありません、むしろお喜びなさい、アッラーは決してあなたを悲しませることはなさいません、アッラーに誓って申しますが、あなたは親族を大事になさるし、正直にお話しになる、それに人の面倒事をひき受け、貧乏人を助け、また客人に親切を尽し、現世の浮沈に苦しむ人々を助けてこられたではありませんか」

ハディージャはこういった後、彼をワラカ・ビン・ナウファル・ビン・アサド・ビン・アブドル・ウッザーの処に連れて行った。彼はハディージャの伯父の息子であり、その伯父は彼女の父の兄弟であった。彼(ワラカ)はイスラーム宣教以前(ジャーヒリーヤ時代)にキリスト教に改宗した人物でアラビア語による何冊かの著作があり、その中には神の命ずるままに書いたインジール(福音書)についての著書もあった。彼は盲目の老人であった。(ともあれ)ハディージャはワラカにこういった。「伯父上(長上への尊称)、あなたの兄弟の息子の言葉を聞いて下さい」これに対しワラカ・ビン・ナウファルは「我が兄弟の息子よ、何を見たのですか」とたずねた。アッラーのみ使いは、それで経験したこと全てを話した。するとワラカは、彼に「それこそナーームス(天使)です。神が預言者モーゼに下された天使です。ああ、もしも私があなたの活動時期に若者であり、またもしも人々があなたを追放する時私が生きておれば、お役に立つであろうに！」と語ったのでした。

アッラーのみ使いが「人々が私を追放するのですか」とたずねると、ワラカは「そうです」と答え「あなたと同様に、これをもたらされた人で敵意に苦しめられなかった方はいませんでした。もし私があなたの活動する時代に生きておれば、必ずや全力を尽くしてあなたを助けるでありますように」といい添えた。(「サヒーフ ムスリム」第1巻 p.118-120)





結末—重い罰

そして結果として「彼らには重い罰が与えられるのである」。彼らが進む先には、恐ろしい罰しか存在しない。焼き尽くし、骨の髄にまでしみ透る恐ろしい罰である。彼らはその恐ろしい地獄の深井戸、袋小路の中に陥るのである。

このような結末を迎える事になる三つの集団とはどのようなものであろうか？ アッラーが語られず、顔を見られることもなく、罪を晴らされることもない人々とは、一体誰のことであろうか？ それほど恐ろしい罰を与えられるのは誰であろうか？

ハディースの、ここまでの部分を読んだ者には、非常な興味がわきあがる。完全に集中して、この三つの集団が誰のことであるか知ろうとしているはずである。預言者ムハンマドは続けて言われる。「服のすそを引きずって歩く者」。これは、うぬぼれや自負心の比喩である。

ローマや古代ギリシアの時代、服のすそを引きずって歩く者の姿が絵で見られる。映画などではさらに顕著に表されている。しかしここで重要なのは服のすそを引きずることではなく、この行為は思い上がりやうぬぼれの印として、その象徴として使われているのである。このハディースで述べられているのもそのことである。

その三つの集団

1. 思い上がりとうぬぼれ者

思い上がりやうぬぼれがいかに重い病であるか、またどれほど悪い結果を招くかは、多くの聖クルアーンの節やハディースで述べられている。例えば、あるハディースで預言者ムハンマドは「その心にほんのひとかけらでも自負心がある者は天国へ行けない」¹とされている。なぜなら、その心にわずかでも自負心やうぬぼれがある者には、アッラーはイスラームへの道を閉ざされるからである。アッラーは聖クルアーンで次のようにおっしゃられている。

「また地上で正義を無視し、高慢である者については、われが啓示から背き去らせるであろう。それでも彼らは、全ての印を見てもこれを信じない。また公正な道を見ても、それを(自分の)道としない。そして邪悪な道を見れば、それこそ(真の)道であるとしている。これはわが印を拒否して、それを軽視しているためである」(高壁章7/146)

うぬぼれは、洞察力を失わせる覆いである。自負心で満たされた心は、この世界の奇跡を見ても何も理解しない。洞察力が失われると、理解や認識も役に立たなくなるのである。

¹ Abu Dawud, Libas 26; Ibn Maja, Zuhd 16

偉大さは、ただアッラーにふさわしいものである。日に五回モスクの塔から宣言されるこの真実が、他の者について語られることは当然認められないのである。

ある神ハディースで、アッラーは次のようにおっしゃられている。

「偉大さは私の覆いであり、私の衣服である。誰であれこの件で私と争おうとするものがあれば、私は彼を引っくり返し、地獄へと投げ込むであろう」²

偉大さはアッラーの属性である。この属性をアッラーと争おうとする者は、正義を持って彼を叱り、地獄へ投げ込まれるのである。

うぬぼれを持った心には信心が根づかない。換言すれば、アッラー以外のものがその心を占めていれば、その心にはアッラーへの信仰は根づかない。行動、振る舞い、うぬぼれや自負心が表れる者の状態はこのとおりである。ハディースではこのような人が「服のすそを引きずって歩く者」と表現されているのである。

祈りのある毎日へ



アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。

ヤージャリール、おお、偉大なる者よ

ヤージャミール、おお、美しき者よ

ヤーワキール、おお、管理者よ

ヤーカフィール、おお、養育者よ

ヤーダリール、おお、指導者よ

ヤームキール、おお、過ちを正し、赦す者よ

ヤーハビール、おお、熟知者よ

ヤーラティーフ、おお、優しき者よ

ヤーアズィーズ、おお、威力並びなき者よ

ヤーマリーク、おお、所有者よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。³

² Abu Dawud, Libas 26; Ibn Maja, Zuhd 16

³ 偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



御自分の時代についての言及（先月からのつづき）

5. 「悪魔の男」から「献身的な人」へ

信頼に値するいくつもの本で、次の出来事が説明されている。ウマイル・ビン・バフブは、教友たちの間で「イスラーム教に献身的な人」として思い出される人物であるが、無知の時代において彼の名は「悪魔の男」であった⁴。ある時、彼はサフワン・ビン・ウマイヤと交渉し、成立した。ウマイルは、ムスリムになったかのように見せかけて、マディーナへ行き、そこで預言者ムハンマドを殺すことになっていた。その見返りに、サフワン・ビン・ウマイヤも彼にラクダを与えることになっていた。

ウマイルは刀を研ぎ、出発した。マディーナへ来ると、ムスリムになったことを告げ、預言者ムハンマドに服従を誓いたいと申し出た。人々は彼をモスクに連れてきた。しかし、教友たちはウマイルを全く信用しなかった。そのため誰も彼を預言者ムハンマドと二人きりにしようとはせず、預言者ムハンマドを取り囲んで守り、彼の動きに注意を払っていた。ウマイルがモスクに入ると、預言者はなぜ来たのかと尋ねられた。ウマイルは嘘を語った。しかしどの言葉も、預言者ムハンマドを信じさせることはできなかった。最後に預言者は言われた。

「あなたは正しいことを言っていない。だから私が言ってみよう。あなたはサフワンとこういう風に話し、私を殺すためにここに来た。サフワンもあなたにこれだけの数のラクダを与えるはずであった」

ウマイルは、頭を殴られたかのようになり、預言者の手にしがみつきながら即座にムスリムとなった⁵。そしてそれ以来イバーダに励み、教友たちから「献身的な人」と言われるようになったのである。

ウマイルとサフワンの間で行なわれた会話を預言者ムハンマドはなぜお知りになったのか？間にこれほどの距離があるのにも関わらず、この知らせを誰がもたらしたのか？

信じる者も、信じない者も、皆、このような出来事について一言一言読んでほしい。我々はここで次の章に移ろう。

⁴ Halid Muhammed Halid, Ricalun Hawle'r-Rasul p401

⁵ Ibn Hajar, Isabah 3/36



自然災害

昨年の暮れにインド洋沿岸の国々で津波によって20万人あまりの人々が命を失いました。昨年、日本も台風や地震で被害を受けました。自然災害について考えてみましょう。

地球は平静でじっとしているわけではありません。我々は地球内外から自然の脅威の被害を受けやすいです。地球の表面は固形ですが、内部は溶けた核からできていて、いつどこで地震が起きてもおかしくない状態なのです。

自然の危険がいつ襲うか分かりません。一般に「自然惨事」だと述べられても、地震、雷、台風、洪水、火災、津波などが異なった強烈さを持ち、異なった形で生活にダメージを与えます。これらすべての惨事に共通なのは短時間にしてその地域が住民とともに荒廃することです。最も重要なのは人間がこれらの危険のいずれとも戦う、あるいはこれらを妨げる力を持っていないということです。

多くの場合、惨事から残るのは激しく破壊された町のみとなります。それでも、大惨事も常に、アッラーの創造である自然のバランスで、地球上の特定の地域だけに影響を与えます。ほとんどの生き物は地球内外からの危険から守られています。保護されているにもかかわらず、破壊をもたらす自然災害が起きる可能性は常に潜みます。アッラーは我々に地球が時々どれぐらい不安定であり得るか示すためにこれらの大惨事を引き起こします。それらの自然災害は我々人類がどれだけ力がないかを思い出させるきっかけとなります。

自然災害から学ぶべきことは他に何なのでしょう。

地球が人間のために特別に創られました。人間がなぜ創られたかはクルアーンの以下の筋で明白に示唆されています：

「かれこそは玉座が水の上にあった時、6日の間に天と地を創造された御方。それはかれが、あなたがたのなか誰が、行いに最も優れているか、明瞭にされるためである。だがあなたがもし、「あなたがたは、死後必ず甦されるであろう。」と言えば、不信心者たちはきつと、「それは明らかに魔術に過ぎない。」と言うであろう。」フード章7節

これらの自然現象のいずれもランダムに起きているわけではありません。すべては科学的な説明を持っています。同じ因果関係は事故、病気あるいは死亡に関してもあります。もちろん我々には身の安全を確保する義務があります。しかし、それでも自然災害によって身に何かが起きることはあり得ます。アッラーは自然災害を使って人間に警告します。例えば、地震によって何千という子供たちを含む人々が亡くなり、また多くの人々はけがをします。アッラーの警告に耳をかさない人たちは「自然の現象」だけのように説明します。そしてほとんどの人はアッラーがこれらを特定の目的のために作ることを理解しない傾向があります。ただアッラーの存在に気付いていて、そしてアッラーの創造の深い理解を持っている人たちだけがこの「自然現象」の後ろに神様の原理を理解します。

クルアーンの筋で、「人はすべて死を味わう。われは試練のために、凶事と吉事であながたを試みる。そして（最後は）われに帰されるのである。」アルアンビヤウウ章35節、とアッラーは良いことや良くないことで人間を試されていると示唆されています。

「あなたは見るであろう、天使たちが八方から玉座を囲んで、主を讃えて唱念するのを。人びとの間は公

正に裁かれ、「万有の主、アッラーにこそ凡ての称讃あれ。」と（言う言葉が）唱えられる。」ズマル章75節

この人生で人に起こっているすべての出来事はテストの一部です。本当に信仰のある人たちはこのなぞの本質を理解します。自分の身に不幸が起こるとはいつもアッラーに頼って、そして過ちを認めて反省すべきです。災害などもアッラーの使用人のようなものであって、そしてそのきっかけで我々はアッラーの約束に気付かれます：

「われは、恐れや飢え、と共に財産や生命、（あなたがたの労苦の）果実の損失で、必ずあなたがたを試みる。だが耐え忍ぶ者には吉報を伝えなさい。災難に遭うと、「本当にわたしたちは、アッラーのもの。かれの御許にわたしたちは帰ります。」と言う者、このような者の上にかこそ主からの祝福と御恵みは下り、またかれらには、正しく導かれる。」バカラ章155-157節



レシピコーナー

サラダクレープ

材料 5~6枚分

全粒粉菓子用 60g	牛乳 120g
卵 50g (1コ)	砂糖 3g (小さじ1)
油 適宜	鶏肉 100g
塩 少々	こしょう 少々
きゅうり 1本	セロリ 1本
トマト 1コ	



【A】： マヨネーズ 12g (大さじ1)

無糖ヨーグルト 30g (大さじ2)

粒マスタード 少々

1-ボールに全粒粉を入れ、真中に砂糖、卵を入れ、牛乳を加えながら泡立て器で混ぜる。

2-フライパンを熱し、油を薄く塗り、「1」を薄く流して焼き、表面が乾いたら裏返して焼く。残りも同様に焼く。

3-鶏肉は塩、こしょうをして蒸し、冷まして棒状に切る。野菜は5mm角の棒状に切る。

4-【A】を混ぜ合わせる。

5-「2」に「3」のをせ、「4」を少しかけてきっちり包む。



シャイターン(悪魔)

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。

そして(祈って)言いなさい。「主よ、悪魔たちの囁きに対し、あなたの加護を願います。主よ、かれらがわたしに近付かないよう、あなたの加護を願います。」(信者たち章第97-98節)

第一のしるし

質問: シャイターンは、創造には関与しません。またアッラーはそのご慈悲と庇護で真実を見出した人々を守られておられます。そして、真実の美しさは真実を見出した人々に力を与え、助けになります。さらに、逸脱のもたらす醜悪さは、道を誤った人々を憎悪させるものです。

これらにもかかわらず、シャイターンの友である人々がしばしば勝っており、また信仰する人々が、常に、シャイターンの災いからアッラーに庇護を求めていることの原因は何でしょうか。

答え: そこにおける英知と意図は以下のとおりです。逸脱と悪は、ほとんどの場合、否定的であって、破壊的であり、無をもたらすものです。導きと善行は、ほとんどの場合、肯定的で、建設的で、損失を補修するものです。

二十日かけて二十人の男性が作った建物を、一人の人が一日で破壊することができるのは、周知のとおりです。様々な器官と生存のための条件が存在することによって成り立つ人の生命は、崇高なる創造主のお力によるものですが、一人の暴虐者が一つの器官を切り裂くことで、生というものに比較するなら「終焉」であり、死が、その人に訪れるのです。だからこそ、「破壊は簡単である」という表現が、ことわざとして用いられるのです。

道をそれてしまった人々が、ほんの少しの力で、強い力を持つ信仰する人々を打ち負かすことがあるのはこのためです。

しかし、真実を見出した人々は、非常に強固な要塞を持っているのです。人々がそこに庇護を求め避難した時には、敵は近づくことができず、何も手が出せないのです。もし、一時的に何か害を与えたとしても、「最後は(主に対し)義務を果たす者に、帰するのである。」(高壁章第128節)に秘められた真実のとおり、永遠の善行、利益によってその損害は帳消しにされるのです。

そして、その強固な避難先とは、預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)のシャリーアと、スンナなのです。

第2のしるし

質問: 完全な悪である悪魔の創造、そしてその存在が信仰する人々を惑わせること、そのせいで多くの人々が教えに対する憎悪を抱き、地獄に落ちてしまうことは、恐ろしく、醜いことのように見えます。絶対的な美、絶対的な慈悲、真の慈しみの持ち主であられるお方は、なぜ、この無限の醜さとすさまじい災難の存在を許されるのでしょうか? 多くの人々がこの質問に関して尋ねてきましたし、多くの人々の心に浮かぶ問題となっています。

答え: シャイターンの存在には、小さい弊害と並んで、普遍的な善や、人間性の完成といったよい面があります。そう、種子から巨大な木まで、多くの段階が存在するように、人間の力にはさらに多様な段階が存在するのです。おそらくは、微粒子から太陽にいたるほどの段階があります。これらの能力と可能性が引き出されるためには、行動や活動が必要となります。行動や活動における進歩は、努力することで引き起こされます。そして、努力は、シャイターンや、有害なもの存在によって発生します。さもなければ、人間の段階は、天使のそれのように一定だったでしょう。何千もの種に値するような、人間の多様な段階は存在しなかったでしょう。

一つの小さい弊害を避けるために、千の利益を放棄することは、神の英知や公正さに反することです。確かに、多くの人々がシャイターンによって道を誤ります。しかし、重要性和価値は、ほとんどがその質によるものであり、数によっていることはほとんど皆無なのです。1,010個の種子を持っている人がいたとして、土の中で種子が化学反応を受けて、その結果、十の木が育ちと千の種子が腐ってしまったとします。その人が木に育った十の種子から受け取る利益は、彼が千の腐った種子から受ける損失を、ゼロまで減少させます。

だから、我欲やシャイターンに対する奮闘によって、星のように人類に誇りを与え、輝かせる十人の人の存在によって、その集団にもたらされる効果、名誉、価値は、逸脱した人々が、教えに対して憎悪を抱くことによって人類に与える害を、ゼロにまで減少させ、視野から消し去るため、アッラーの慈悲と英知と公正さは、シャイターンの存在を許し、それが人々に害を与えることを許したのです。

信仰する人々よ。このすさまじい敵に対するあなたのよろいかぶとは、クルアーンという作業台において作られる、アッラーへの畏怖の念です。そして、あなたの盾は、預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)のスナナです。あなたの武器は、シャイターンに対してアッラーから庇護を求めること、許しを乞うこと、アッラーの保護のもとに救いを求めることなのです。

復活の分は3月号からつづく。。。



「畏れ(タクワー)」

『畏れる者たちにとっての導き』(2:2)であるクルアーンには、「タクワー(畏れ)」に関連した言葉が約290回登場する。中でも「畏れなさい」といった命令形では90回も出てくるほど、ムスリムが身につけるべき性質のうちでは最も大切なもの、それが「タクワー」である。クルアーンを「導きの書」として活かし、至高のアッラーの臨在を感じる日々を生きるには、「タクワー」なしには始まらない。でも実際は、「ムスリムになってから『タクワー』という言葉は数多く耳にしてきたけれど、どうもまだ自分の血肉としては理解できていない…」というのが私の正直な気持ちである。今回はそのあたりの消化不良を少しでも改善し、クルアーンを真にアッラーの御言葉として受け止めて心を震わす人の一員になるための歩みを深めるきっかけとなることを願いつつ、『クシャイリーの書簡』を開きたい。

☆クルアーンとスンナにおける「タクワー」

至高のアッラーは次のように仰せられている。

『人々よ、われは一人の男と女から汝らをつくり、種族と部族とに分けた。これは汝らを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も尊い者は、汝らの中で最も主を畏れる者。まことにアッラーは、全知にしてあらゆることに精通された御方である。』(49:13)

クシャイリーの書簡「畏れ(タクワー)の章」冒頭で挙げられているクルアーンの一節は、特に『アッラーの御許で最も尊い者は、汝らの中でも最も主を畏れる者。』という箇所だけである。イスラームにおける「尊さ」の基準が、権威でも能力

でも財産でもなく、「主への畏れ」にあるということ、これほど簡潔かつ明確に表現している言葉もないだろう。その意味では、この一節を挙げるだけでも十分と言えるが、アッラーの御言葉に聞き飽きるということはない。この際、せっかくだからもう何節かご紹介しよう。

『それこそは、疑いの余地のない啓典である。その中には、主を畏れる者たちへの導きがある。主を畏れる者たちとは、目に見えないものを信じ、礼拝の務めを守り、またわれが授けたものを施す者、そしてわれが汝(ムハンマド)に啓示したものの、また汝以前に啓示したものを信じ、来世を堅く信じる者たちである。』(2:2)

『アッラーを畏れ、知りなさい。まことにアッラーは、主を畏れる者たちと共におられるということ。』(2:194)

『アッラーを畏れ、アッラーはすべてのことを知り尽くされているということを知りなさい。』(2:231)

『汝らがアッラーに帰される日を恐れなさい。そのとき、あらゆる者は自らが稼いだ分を清算され、誰も不当に扱われることはないであろう。』(2:281)

『人々よ、汝らの主を畏れなさい。かれはひとつの魂から汝らを創り、またその魂から配偶者を創り、兩人から無数の男と女を増やし広められた御方である。汝らがその御名において互いに頼みごとをする御方、アッラーを畏れよ。また近親の絆を(尊重せよ)。まことにアッラーは汝らを絶えず見ておられる。』(4:1)

続いては、我らが指導者ムハンマドさま（祝福と平安あれ）のお言葉を。

クシャイリー師は、教友アブー・サイド・アル＝フドリーさま（アッラーのご満悦あれ）にまで遡る自らが聞き知った伝承経路によって、次のハディースを伝えている。

教友アブー・サイド・アル＝フドリーさま（アッラーのご満悦あれ）は言われた。

「ある人が預言者さま（祝福と平安あれ）のもとへやって来て、『アッラーの預言者さま、わたしにご忠告ください。』と言った。そこで預言者さまは次のようにお答えなされたのである。

『アッラーへの畏れを大切にしてください。それこそは善いことすべてをまとめるものですから。そしてジハードを大切にしてください。それこそはムスリムにとっての修道生活（ラフバーニーヤ…モットーとして一意専心すべき行い）ですから。それからアッラーを思い出すこと（ズィクル＝ツラー）を大切にしてください。それこそはあなたにとっての光ですから。』

（アブー・ヤアラーが伝える伝承経路弱性のハディース）

また同じくクシャイリー師自身が教友アナスさまにまで遡る伝承として伝えるには、「アッラーの預言者さま、ムハンマドの家族とは誰のことをいうのですか？」と尋ねる者があつた。そこでお答えなされた預言者さまのお言葉は、『アッラーを畏れる者すべてです。』であつた」という。

（タバラーニーが「アウサト」で出典する伝承経路弱性のハディース）

☆「タクワー」の意味

クシャイリー師は、先ほど挙げた「預言者ムハンマドの家族とは、アッラーを畏れる者すべてである」というハディースのあとで次のように述べている。（注-「」は筆者の付け足し）

『タクワー』とは、もろもろの善きものをまとめるものである。そして『タクワーの真実』とは、アッラーへの忠誠を尽くすことによって、かれの懲罰に用心することをいう。「誰某は盾で身を守った（イッターカー フラーヌン ビ＝トゥルスィヒ）」と言われる通りである。」

ちなみにイブヌ・ファーリスの『原義推定辞典』によれば、「タクワー（Taqwaa）」の語源である「Wa/Qa/Ya」は「何かによってあるものを守り防ぐこと」を意味するとのことである。（2/641）それゆえ、「アッラーを畏れよ」とはつまり、「あなたとアッラーとの間に（お怒りに触れずにすむよう）防具となるものを備えよ」という意味になるという。預言者さま（祝福と平安あれ）のお言葉に、「たとえナツメヤシの実半分によってでも、火獄を恐れなさい。」とあるのも、つまりは「ナツメヤシの実半分为（サダカとしてほどこすことによって）、あなたを火獄から守る盾としなさい。」と言おうとされたからである。

また、『偉大なクルアーンの注釈』でイブヌ・カスィールは、教友ウマルさまが教友ウバイ・ブン・カアブさま（兩人にアッラーのご満悦あれ）に「タクワー」について尋ねたときの伝承を伝えている。

「とげのある道を通つたことはないかね。」

「もちろんあるとも。」

「どんな風に？」

「腕まくりをして（気合いを入れて身構え）、懸命に（とげに刺さらないように注意しながら）。」

☆「タクワー」の段階

あらゆる徳や境地がそうであるように、「タクワー」にも基本に始まってさらなる高みへと発展してゆく段階がある。クシャイリー師が語る四つの段階にご注目されたい。

『タクワー』の基本は、①「シルク（至高のアッラーに同位者を並べ立てることを恐れること）」である。次いで②「違反行為や悪事を（犯すことを）恐れること」となり、③「疑わしいものを恐れること」となる。そして遂には、④「余分なものを捨ておくこと（罪とは無縁の許されたものであっても、必要最低限のもの以外は放棄すること）」となる。（注-「」や番号は筆者の付け足し）

私はアブー・アリー・アッ=ダッカーク師（アッラーのお慈悲あれ）が、次のように言われるのを聞いたことがある。『そうした境地には、それぞれ別の入り口がある。『あるべき本当のかたちでアッラーを畏れなさい。』（3:102）という至高のアッラーの御言葉の解説にある通りである。つまり（アッラーにふさわしい本当のタクワーとは）、アッラーは従われてしかるべきであり、背かれることはないということ。そしてアッラーは思い出されてしかるべきであり、忘れられることはないということ。さらにアッラーは感謝されてしかるべきであり、恵みを前に知らない振りをされることはないということである。』

それから間隔をおき、クシャイリー師は自らが聞き知った伝承経路によってイブヌ・アターイッラー師の言葉を伝えている。曰く、「タクワーには表と裏がある。表とは超えてはならない限度（フドゥード）を守ることであり、裏とは意図（ニーヤ）と誠実さ（イブラース）のことである。」

さらにクシャイリー師は、ある伝承として言い伝えられているものを挙げてこう言っている。

「ある伝承によれば、タクワーには様々な段階がある。普通一般の人たちには、シルク（至高のアッラーに同位者を並べ立てることを恐れることを意味し、特別な人たちには、違反行為を恐れることを意味する。そしてアッラーに近い人たちには、行いを手段として頼りとする（つまり、たとえば病気を患ったときに「薬を飲む」という行いが自分を癒してくれるのだと無意識にでも思い込むこと）を恐れることを意味し、預言者たちには、行いそのものを自らが成し遂げたものとするを恐れることを意味する。それは彼らのタクワーがアッラーよりもたらされ、アッラーに立ちかえるものだからである。」

☆「タクワー」の目安

人の「タクワー」を示す三つのものとして、クシャイリー師は別のある伝承を挙げている。

「言われているところによれば、『人の「タクワー」は、次の三つによって指し示される。①自分で得ることはなかったものに関する十分な信頼。②実際に得られたものに関する十分な満足。③失ったものに対する十分な忍耐。』（注-「」や番号は筆者の付け足し）

☆「タクワー」に関する、先達の言葉

—サハル・ブン・アブディッラー・アッ=トゥストゥリー師曰く、「援助者はアッラーのほかになく、道案内はアッラーの御使いのほかになく、旅支度はタクワーのほかになく、行いは辛抱なしにはありえない。」

—同じくサハル・ブン・アブディッラー・アッ=トゥストゥリー師曰く、「タクワーを成立させた

いは、罪という罪をすべて捨て去るがよい。」

—アン＝ナスラアバーズィー師曰く、「タクワーを常とする者は、この世を去ることに思い焦がれるようになる。それも至高のアッラーがこう仰せられているからだ。『主を畏れる者たちにとっては、来世の住まいこそ最も素晴らしい。汝らは分かろうとしないのか。』(7:169)」

—ある人はこう言ったという。

「タクワーを本当に自分のものとした者には、アッラーがその者の心にとってこの世から身を引くことを容易きものとしてくださる。」

—アブー・アリー・アッ＝ルーザーバーリー師曰く、「タクワーとは、そなたをアッラーから遠ざけるものを避けることである。」

—タルク・ブン・ハビーブ師曰く、「タクワーとは、アッラーからの光によってアッラーに忠実であるとする行いであり、アッラーの懲罰を恐れることである。」

☆より理解を深めるために

スプハーナッラー、クルアーンやハディースは言うまでもなく、相変わらず先達の言葉は聴く者の背筋を正してくれるような教訓に満ちている。今回私たちは、何を学び、何に生かせるだろうか。言わずと知れたことかもしれないが、イスラーム学は大いに「実践の学問」である。だから学んだことを実生活の中で生かせなければ、その人が得た学問や知識に価値はないと言っても過言ではない。中国の王陽明が説く「知行合一」や、日本の細井平州などが目指した「実学」の精神に相通ずるものがあると言えば、より身近に感じていただけるだろうか。ともあれ、理論や概念をより深く理解するには、自分で実験なり体験なりしてみる

のが一番確実である、ということには異論を唱える人はいないだろう。

最後に、預言者さまからの最高のアドヴァイスをひとつ。教友アブー・フライラさま（アッラーのご満悦あれ）によると、アッラーの御使いさま（祝福と平安あれ）は次のように言われたという。

『皆さん、思い込みには気をつけなさい。思い込みは最も信用ならない話です。お互いに過敏になってはいけません。またお互いに相手のことをさぐったり、競争したり、妬んだり、憎んだり、背を向けたりしてはなりません。そうではなくて、アッラーのしもべとして、アッラーが皆さんに命じられたように、お互いに兄弟となるのです。』

ムスリムはムスリムにとっての兄弟であり、兄弟を不当に扱ったり、見放したり、軽蔑したりはしないものです。

アッ＝タクワー ハーフナー（タクワー〔アッラーを畏れる気持ち〕はまさにここに）。タクワーはまさにここに。タクワーはまさにここに。—3回胸元を指して言われました。

ムスリムが同胞を軽蔑すること以上に悪いことはありません。あらゆるムスリムは、ムスリム各人にとってハラーム（神聖にして犯すべからざる存在）なのです。その血も、財産も、名誉も。』（イマーム・マーリク、ブハーリー、ムスリム、アブー・ダーウード、ティルミズィー出典。このハディースの言い回しは、イマーム・ムスリム出典のもの。）

さらにイマーム・ムスリム出典の伝承では、上記のハディースに次の一文が続く。

『至高のアッラーは、皆さんの姿かたちや財産をご覧になるわけではありません。皆さんの心の中

や行いをご覧になるのです。』

スーパーナッター、さすがは全人類にとって最高の指導者にして教育者、ムハンマドさまのお言葉である。彼にアッラーの祝福と平安あれ。「タクワー」を身にまとうには、具体的にどうしたらいいのか、ぼんやりとしか分からなかった「タクワー」のイメージを、曇りなき青空のように明確にお教えくださった。「タクワー」はまず心でまとうべきであり、それを行いで表現することが肝要なのだ。私たち自身と至高にして万物の主アッラーとの間の「縦のつながり」、そして同じ信仰を分かち合う兄弟姉妹との間の「横のつながり」両方を大切に、改善してゆくことが求められているのである。(アッラーフ アッラム-よりよく知るのは、アッラーなり-)

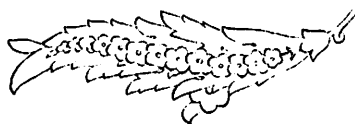
『汝ら信仰する者たちよ、アッラーを畏れ、明日のために自らが何をしたかをよく見てみなさい。汝らはアッラーを畏れよ。まことにアッラーは汝らがすることすべてに精通しておられるのである。』(59:18)

「アッラーを畏れる気持ち」は、アッラーを意識し、アッラーの御目を気にかけることから芽生

えはじめるものだと思う。「あたかも火に触れるのを恐れるように、アッラーのお怒りに触れるのを恐れるのが『タクワー』だと、私が敬愛するある同胞は教えてくれた。

至高のアッラーはその限りない英知により、私たち人間が今は目に見えない地獄や天国を想像して疑似体験できるように、炎の熱さと痛み、快樂の愉悦さと喜びを身をもって体験できるようにしてください。燃え盛る炎は、地獄の業火の超ミニチュア版であり、美味しい食べ物や飲み物、愛し合う夫婦が交わす情愛の喜びは、天国の愉悦の超ミニチュア版である。世界は教訓に、アッラーのみしるしに満ち満ちている。私たちが尊敬する人、あるいは愛する人の機嫌を損なわないように細心の注意を払うのは、最も尊敬され愛されるべき至高のアッラーに対する気持ちのあり方を悟り、改善してゆくための「訓練」のようなものともいえよう。願わくは、至高のアッラーが私たちの心を清め、「タクワー」をお恵み下さいますように。アーミン。

《参考文献》 復刻版「クシャイリーの書簡」
P.230-235、2002年ダール・アル＝ファルフル版





シャイターンの囁きは毎日のように聞こえます。シャイターンの存在は、その人その人によってその存在の感じ方が異なります。私の場合、シャイターンとの戦いとは、怠けることと、または自分に甘んじることとの戦いです。イスラームにおいて、怠けることはよくないことです。だらだらとした生活は、健康的な生活に支障を与える場合があります。生活のリズムが崩れ、礼拝がおろそかになり、食生活が乱れ、自分の行動が雑になっていきます。自分の行動が崩れると、自分の周りの人にもその影響を与えてしまいます。私は結婚しているので、私が怠けると、主人にもその影響を与えてしまいます。妻として家庭を明るく、清潔に、健康に保つことは重要なことだと思いますが、私が怠けてしまうと、なんとなく家中は明るさを失ってしまいます。

ハディースでは、清潔さは信仰の半分であるといっています。そして、人はみな一日を朝から始め、自分の魂を売る。ただしその結果魂を自由にする者もあれば、それを破滅に導く者もある、とあります。清潔であることは信仰の半分といわれる通り、清潔であれば気分も一新します。礼拝の前に体を清めることも気分を清めることにつながります。毎日五回の礼拝の度に、シャイターンからお下り下さいと唱えますが、シャイターンはいかにも身近にあることが分かります。人は何をするにもいくつかの選択があります。より善い道を選ぶことがイスラームでは善いこととされています。ある金額の収入があった時に、いくらかを施しにしたり、あるいは、困っている人を助けたり。この時すべての金額を自分の為に使うことができるし、また、困っている人を見過ごすこともできます。しかし、より善い道をとるために奮闘することはイスラームではとても大切なことなのです。

人間は弱いものですから、シャイターンの声がよく聞こえます。もう少し寝ていよう…少しくらい…明日やればいい…誰かがやってくれる…自分がしなくても…次回は…忙しいから…疲れているから…シャイターンの声に忠実になってしまえば、その声に抵抗なく行動してしまうでしょう。つまり、理性のない行動に疑問も持たなくなってしまうのです。そうならないように、常にシャイターンの声に疑問を持ち、奮闘していかなければ理性のない人間になっていってしまうでしょう。そうならないように毎日シャイターンから自分を守るように奮闘することが必要なのです。



マレーシアからイギリスへの便は、マレーシア航空だったが、バージン・アトランティックの機体が使われていた。客席は、日本-マレーシア間とはうってかわって、かなりガラガラだった。乗客も、日本人らしき人々の数もぐっと減って、イギリスとかヨーロッパ系らしき人々が増えた。係の人も、機内放送も、マレー語と英語だけの世界になった。乗客の少なさからか、係の人が何となくラフな感じになったようで、私も何となくリラックス度が増した気がした。

突然、男性の係員の人々がマレー語らしき感じで話しかけてきた。私は全然分からなくて、また「私はマレー語が話せません。」と英語で言った。すると相手は「は？」みたいな感じで2秒ほどポーズがあった。その後、どこの国とか、ムスリムとか、ひとしきりそんな問答を英語で交わした。その係の人は日本人の中にムスリムがいるということによほど驚いたらしい。日本のムスリム事情をいろいろ尋ねてきた。当然、その人は飛行機の係の人なので、仕事があるのだが、合間を見て何度か質問しに来た。私は、この旅でその後何度も口に出すことになる、「Japanese Muslim」という語彙を、自分で認識しながら初めて口にした。少し誇らしかった。

バージン・アトランティックの機体の設備は新しく、一人一人にテレビ画面がついていた。それを操作するリモコンは、マルチな感じで、いろいろな用途に使いそうなボタンがたくさんついていた。その中の一つ、人の形のマークに目がとまった。何だろう、これ？と思って試しに押ししてみ

ると、数秒もしないうちに「マダム？」と係の人に声をかけられた。しかも、映画に出てくる支配人みたいな人が来てくれたのだった。(こ、こんな気楽な感じの人のマークは、呼び出しボタンだったのかあ!?) と思って青ざめたが、とりあえず「トイレはどこでしょうか。」と質問してみた。私の指は、まだ人の形ボタンを押したままの状態であって、いかにもあやしい感じだったが、その人は親切に教えてくれた。実際、いつもトイレの場所が分からなくて(トイレなのにトイレと認識できなくて)四苦八苦していたので、少しは有意義な質問だったかなと思った。

もう一つ驚いたことは、乗客の行動だった。日本-マレーシア間では、日本人らしき人々が多く、飛行機に乗るとまずするのは、ガイドブックか雑誌をひらくか、仲間とおしゃべりすることだった。だが、今回は、乗客の行動のナンバー1は、読書だった。日本-マレーシア間と比べてやたら静かに感じるくらい読書率が高かった。本型のガイドというわけでもなく、本当に読書にふけている感じなのだ。

乗客の人が、係の人に何か言って、席を動くケースが増えた。何だろうと思っていたら、ジュースか何かを持ってきてくれた係の人が、「今は離陸するから駄目だけど、安定したら、こんなに空いているから、スタッフに声をかけて、好きなところに行って、寝転がっても良いですよ。」と、すごい提案をしてくれた。私はベジタリアンミールの注文をしているので、どこに行ったのか分からなくなると困るからだ。

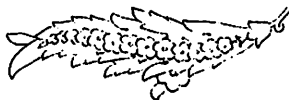
時差の関係で、マレーシアを出るとすぐ「就寝タイム」になった。私は、係の人の言葉どおりにして、ゆったり足を伸ばして眠ることができた。飛行機が激しく上下する時もあつたけれど、寝ている方が衝撃を感じにくいような気がした。眠れるだけ眠ってしまうと、どうしても起きたくなくなってきたので起きた。機内はまだ暗いままだし、機内食の時間も遠そうだったので、ここぞとばかりに例のマルチなりモコンでファミコン・ゲームをした。子どもの頃、家にはファミコンが無かった。でも無くてよかったと今では思っている。というのは、私はそういうものにのめりこみやすい性質なので、もしあつたら大変なことになっていただろうと思うからだ。ある時、もらい物か借り物か何かで、家にファミコンや「ゲームボーイ」があつた時期があつたのだが、その時にそう悟つた。それでも、飛行機の中で一度やりたかつたのでやってみたのだ。時間はどんどん経つし、ゲームの技もどんどんうまくなるのだが、やはり最終的には、私にはこういう物は無くて良いなと思つた。

その後、機内が若干明るくなり、少し窓の覆い

を開けてもいい状況になってきたので、外の空を見始めた。雲と空しかない景色だったが、いろいろなことを考えた。光が、とてもきれいだった。

そしてとうとう、着陸に向けて飛行機が高度を下げ始めた。少しずつ、少しずつイギリスの山と街並みが見えてきた。見える景色の全体が、とてつもなく大きな港みたいに見えることもあつた。田園地帯みたいな感じの風景が、ゆっくりゆっくり近づき、ここはどこだろうと思つているうちに、着陸態勢に入りそうな感じになってきた。私はまた耳が痛くなることを心配し始めた。でも、耳抜きはやめた。係の人が、プシューと、何かスプレーを上部の荷物入れに向けて噴射していた。その正体は未だ不明だが、私はその時、それが耳痛防止スプレーなのではと思ひ、心もち鼻をひくひくさせたりしてみた。そして、その、「何だ？ここ？」みたいに思つていた田園地帯風のところに、飛行機が降下し始め、えーっと思つているうちに着陸した。耳は全然痛くならなかつた。そしてそこが、ヒースロー空港だった。

・・・つづく



『アイス・エイジ』 Ice Age

1月も半ばに近づいてくると、街の雰囲気は節分とバレンタインデーの混じった不思議なものになってきます。ついこの間まで門松でお正月気分だったのになあ…と思いつつ、今月は節分について少し考えてみました。この雑誌が出る頃には節分を過ぎてしまっているかもしれませんが、そこは多目にみてください。

節分は豆を撒いて鬼を退治する日。節分にはなんとなくそのようなイメージがあり、実際様々なところで「豆を撒いて鬼を退散させる」祭りが行われています。珍しいものでは、私の実家の近くの箱根の場合、鬼が水上スキーで芦ノ湖を逃げ、神官も水上スキーで追いかけるという行事があります。また、私が現在住む千葉県では成田山が有名で、ここの節分では「福は内」のみを唱え、「鬼は外」は言いません。『日本の行事祭り事典』（三省堂）などを見ても、節分には本当に様々な場所で鬼退治が行われているのだなあ、と思います。この豆まきは、もともと中国から伝わった風習だそうで、日本では706年に宮中で行われたのが最初だとか。豆まきよりは行われる頻度の低い「鯛の頭を柵に刺して戸口に挿す」という風習は、近世以降に魔除けのために行われるようになったものだそうです。

節分は、もともと「季節の分れ目」という意味で、もともとは「立春」「立夏」「立秋」「立冬」それぞれの日の前日を指しました。ですが、冬から春になる時期を一年の境としていたため、「節分といえば立春の前日」という考え方が定着したようです。冬の終わりや春の始まり、そこで何故鬼退治なのか…とも思いますが、それはさておき春の始まりは待ち遠しいものです（今は花粉症の方が多いので、「嫌いな季節＝春」という方も増えているとは思いますが…）。冬から春に変わるといっても、瞬時に変わるわけではなく、徐々に空気が春らしくなってきます。

それを思ったとき、ものすごく長い期間で考えれば、今もある時と時の「間」の時期なのだな、と思い当たりました。それは、氷河期と氷河期の間、つまり間氷期です。地球の歴史を見てみると、氷河期と間氷期を繰り返している（いたであろう）ことがわかります。つまり、およそ1万年前に前の氷河期が終わったため、現在は次の氷河期までの温暖な時期、間氷期であると推測できるようです。地球は温暖化していることもあり、本当のところはどうなっていくのかよくわかりませんが、この、間氷期から氷河期への移り変わりの時期を舞台に描かれた映画が『アイス・エイジ』です。

それはおよそ2万年前の地球でのこと。氷河期の寒さを避けて南へと移動する動物たちとは反対に、孤独を愛するマンモスのマニーだけは北へ向かうことにします。あまりにのんびりしていたため仲間に置いて行かれ、身の危険を感じたナマケモノのシドは、大きなマンモスといれば安心、と嫌がられながらもマニーについていくことにしました。その頃、人間たちの小さな集落をサーベルタイガーのソト率いる一軍

が襲っていました。赤ん坊のロシャンを抱いて必死で逃げる母でしたが、川に転落、母子に気づいたシドにロシャンを託し、母は命を落としてしまいます。人間に無関心のマニーをよそに、シドはロシャンが仲間と離れて可哀想だから、人間たちのもとに届けようと言い出します。と、そこへソトの仲間、ディエゴが近づいてきます。ロシャンを自分のものにしたいディエゴは、大きなマンモスには逆らえないと知って、自分が人間の村に届けよう、道をよく知っているからと申し出ます。しかしそれを信じられない二匹は、自分たちで届けることにし、ディエゴを道案内として旅をすることになります…。

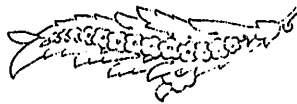
CGアニメーションながら、生き生きとした動物たちの動きと様々な冒険、わかりやすい話の展開に、大人も子供も楽しめる話ではないかと思います。実際は異種動物でのコミュニケーションは大変難しいため、ナマケモノとマンモスとサーベルタイガーと一緒に何かするのは不可能です。しかし、ここでは動物たちが暖かい友情を育み、仲間意識を持って行動するなど、フィクションだからこそ語りうる様々なことがここでは描かれています。ただ、今は同じ人間ですらうまくやっていくのがなかなか難しい世界です。同じ人間同士だからこそいがみあってしまうのか、違うものたちとの方がわかりあえるのか、それは一概には言えません。また、『アイス・エイジ』の中では、人間たちは動物と話をしません。それも、なんだか現代へ向かううちに動物たちを押しつけてしまった人間の姿をみるようで、なんとなく悲しく思っています。現在は地球としては間氷期かもしれませんが、人間の心の中は氷河期なのかもしれません。

ですが、氷河期がやがては終わり、暖かい間氷期になります。同様に、人の心も氷河期のような冷たさから、暖かく様々なものが芽吹く春のような心に移り変わっていくといいですね。

『アイス・エイジ』 2002年 アメリカ 82分

監督：クリス・ウェッジ

出演：レイ・ロmano（マニー：マンモス）／ジョン・レグイザモ（シド：ナマケモノ）／デニス・リアリー（ディエゴ：サーベルタイガー）。





ねずみとライオン

ある日、ねずみが草原をさんぽしていました。ところが、草だとおもったのはライオンのたてがみでした。ひるねをしていたライオンは、目をさましていいました。

「うおー。よくもひるねのじゃまをしたな。ちょうどはらがへったところだ、ひるめしにたべてやるぞ。」

ライオンは、ねずみをつまんで、ぱくっと、ひとくちでたべようとしてました。「ライオンさん、わたしのよ
うなちいさなものをたべても、おなかのたしにはならないでしょう。どうか、たすけてください。あとで
きつとごおんがえしをしますから。」

「わっはっは。おまえのようなちびが、どうやっておんがえしをするのだ。」

そうはいつでも、ライオンもあわれにおもって、ねずみをはなしてやりました。「ライオンさんありがとう。
かならずごおんがえしをしますからね。」と、もういちどいつからねずみはよろこびいさんでかえってい
きました。それからいく日かたって、ライオンは人間のわなにかかって、あみにとじこめられてしまいま
した。そこへ、あのねずみがとおりかかりました。ねずみは、ごおんがえしはこのときとばかり、するど
いはであみをくいやぶり、とうとうライオンをたすけだしました。

「どおです。ライオンさん。ちびでもちゃんとごおんがえしできたでしょう。」「ありがとう、ねずみくん。
らびでもりっぱだよ。きみをみなおしたよ。」

ねずみとライオンから学べる事

ここから読みとれるのは、小さきことの重要さです。ライオンはねずみを憐れんで昼飯にする事をやめ、
逃がしてやりました。ライオンにとってこれは取るに足らないことでしたし、ねずみの恩返しも期待して
いなかった事でしょう。しかし、これが後に自分の命を救う大きな鍵となります。ハディースには、ある
男がのどを乾かしている犬に井戸から水を汲んで与えたところ、アッラーがこの行為を愛でられ女の(過去
の罪過)をお許しになった、というお話があります。犬を憐れみ救った一つの出来事が後に自分をも救った
という点がライオンの話とまさに重なりあっています。はたから見れば小さな一つの出来事が、実は見え
ないところで大きく実を結んでいるということを思うと、日ごろの生活で取るに足らない一つ一つの行動
も決して無駄でない事が分かります。道から石を取り除く事も善行のひとつとイスラームでは言われます
が、小さな善行が審判の日に自分の救いになりうるということであり、決してそれらをないがしろにして
はならないということだと思えます。逆にこれらをないがしろにすれば、命取りにもなりかねません。ア
ッラーは慈悲あまねく慈愛深いお方。小さな善行を見つけては、それを理由に人を天国へ招こうとしま
す。このことに感謝し、日々小さなことから努力できればと思います。



オマルがアブ・バクルに張り合いを試む

オマルは言った。

ある時み使いがアッラーの道のために、貢献するように要望した。その頃私は多少財産を持っていたので考えた。

アブ・バクルは私がアッラーのために使うのに驚いていた。今日こそアッラーの恵みで彼を凌いで上に出るであろう。なぜなら私は今使ってもよいものを一、二所有している。そう考えて私は快活に家に帰り、そして私の全財産を二分し、一方を家族の者たちに残して他方を提供した。

彼は私にこう聞いた。オマルよ！君は家族のために何か残したかね？

オマル はいアッラーのみ使いよ。

み使い 何ほど？

オマル ちょうど半分です。

そのうち、アブ・バクルが重荷を負うてきた。それが彼の全所有物であることが直感された。私があとで聞いたところでは、

み使い 君は家族のために何を残したかね？

アブ・バクル 私は彼らのためにアッラーと彼のみ使いとを残しました。

オマルは言っておる、

その日、私は自分の心に銘記した。今後決してアブ・バクルを凌ごうとする気は起こすまいと。

アッラーはクルアーンに仰せられている。

一人は他と相競って善行に励め。(5:48)

こんな犠牲のための、健康な張り合いは全く望ましく歓迎すべきである。この事件はタブク遠征のときに起こったもので、サハーバ(教友)達のみ使いの呼びかけに答えた寄付は、彼らの力量を超えたものであったことはすでに第二章に記したとおりである。アッラーよ！全ムスリムのために最上の報償を下したまえ！

購読価格(郵送費込み)バックナンバーは、1部200円(日本以外は1部250円)

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

info@yasuragiweb.com

yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部